上野動物園　見どころ新聞

ZOO TODAY

11月号

（No.505　2026年11月3日発行）





アジアゾウのアルン６才に…①

10月31日、アジアゾウのアルン（オス）が６才になりました。10月の計測では、頭からお尻までの長さが約250cm、足元から背中までの高さが約215cm、体重は2300kgと、着実に成長しています。


折れた右牙の先

野生では、若いオス同士で牙を使って押し合ったりして力比べをします。アルンも、頭でタイヤを壁に押し付けたり、ひもに牙をひっかけたりと、遊具を相手に力強く体を動かします。9月19日にはその拍子に右牙の先が約7.5cm折れてしまいました。オスの牙はこのように折れたり擦り減ったりしながらも、生涯にわたって伸び続けます。これからの成長と、若いオスらしい活発さに注目してください。


デア

イコロ、ありがとう…②

国内の飼育園館で協力してホッキョクグマの繁殖に取り組むため、イコロ（オス）が天王寺動物園へ移動することになりました。これまでホッキョクグマについて多くの知見をもたらしてくれたイコロ。新しい場所でも活躍してくれることを願っています。

当園には、デア（メス）が残ります。寒い地域でくらすホッキョクグマにとって、気温が下がるこれからの季節は、より動きやすい時期です。お昼前後の展示休止時間がなくなったため、水中で泳ぐ様子、陸地を歩く姿、鼻先をひくひくと動かして周囲のにおいをかく様子など、さまざまな行動を観察できる機会が増えています。

夜の森：においが活動の手がかり…③

空いていた部屋でもう1頭のスンダスローロリスの展示を始め、3部屋で見られるようになりました。夜行性のサルにとって、暗い森の中で活動するために、においは大切な情報です。肘や肛門から出る分泌物を枝に擦り付けて、なわばりを主張したり、仲間に自分の存在を伝えたりします。また、野生では同種以外の様々なにおいの刺激もあります。この野生と同じような刺激を再現するため、10月下旬から展示場には、様々な種類の新鮮な枝葉（においが異なる）やゴリラが食べ残した枝葉（ゴリラのにおい付き）なども入れています。

枝葉のにおいを探索する姿や、自分のにおいを枝に付ける様子を観察してみてください。

公式X

⁘スローロリスのにおい探索の様子はこちら➡




マヒワ　アトリ

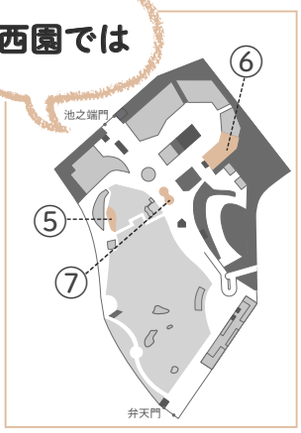
日本の鳥Ⅰ：冬鳥を探してみよう！…④

北国から日本（東京）へ渡ってきて冬越しをする「冬鳥」が見られる季節になりました。まず展示室にいる鳥を観察して色や大きさなどを覚えたら、次は野生の冬鳥を探してみましょう。

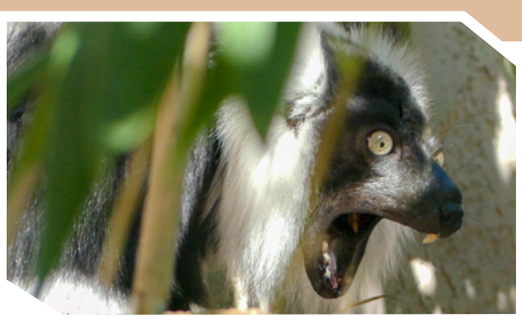
アトリ：スズメほどの大きさで、胸の柿色が鮮やかです。「日本の鳥Ⅰ」中央の大窓から見える「日本の湿原」に、ときどき数十羽の群れて水を飲みに来ます。

マヒワ：スズメよりも小さな、黄色い鳥です。「日本の鳥Ⅰ」の向かい側（旧ハンタ舎）近辺の高木などに、よく１０～２０羽くらいの群れで現れます。

西園では



大きい声が自慢です…⑤



クロシロエリマキキツネザルはときどき一斉に「グアオーッ、グアオーッ」と大きい声で鳴き始めます。これは喧嘩しているわけではありません（喧嘩のときはもっと高い声で「キャキャッ」と鳴く）。
野生ではマダガスカルの森でくらしていますが、この大きな声は、森の中で遠くまで響きます。危険を知らせたり、自分たちのなわばりを知らせたりと、仲間とのコミュニケーションをとるのに役立っていると考えられています。いきなり鳴き始めるように聞こえても、実はその前に小さくうなることが多いです。大きく鳴く前の「合図」をぜひ聞きとってみて下さい。

⁘ヒンコ de 観察「キツネサル編」11 月中旬スタート予定！詳しくはスーネットをご覧ください。



小獣館地下：耳が大きなサル…⑥

デミドフコビトガラゴは、夜行性のサルの仲間で、とても大きな耳を持っています。暗い森の中では、餌である昆虫が動く小さな音などを耳で聞き分けて探します。そこで動物園でもこのような探索行動を引き出すため、竹製のカップを複数並べた給餌器を地面に置き、カップの中に落ち葉とともに昆虫を入れて隠しています。昆虫が動くと落ち葉が擦れる音が出ます。ガラゴはその方向に両耳を寄せて 1 つずつカップを調べ、手を伸ばして餌を探し出します。

ケープペンギン抱卵中…⑦



一年を通じて産卵が見られますが、秋から冬にかけて繁殖行動がもっとも盛んになります。当園では、生まれた卵をとりあげて親には偽卵を抱かせます。そして卵が有精卵か無精卵かを確認し、増やしたい血統のものは孵卵器で安全・確実に育て、ふ化直前に親に戻します。
１０月末現在、３ペアが抱卵中です。巣穴の中で腹ばいになって卵を温める親と、その入り口に立ちはだかって守る親。２羽で交代しながら、卵やヒナを育てていきます。

よくある質問
前号アンケートに寄せられた質問にお答えします

Q. 自然の中で、動物が植物を食べ尽くしてしまうことはないのですか？
A. 本来の自然は、そうならないようにバランスが保たれています。


クロサイ

①植物が減ると、動物も減る

植物が減ってしまうと、動物も飢えて死んだり、栄養不足で繁殖できなかったり、他の場所へ移動したりして、数が減ります。するとまた植物が増えます。そのように、少しずれてお互いに増減を繰り返しながら、植物の量と動物の数は維持されるのです。

②植物も対策をしている

植物は毒をもったり、トゲをもったりして、動物に食べられることを防いでいます。多くの動物は、一種の毒を多量に摂らないよう、いろいろな植物を少しずつ食べています。

③動物も、食べるだけでなく植物を増やしている

動物は植物のタネを体にくっつけて運んだり、糞とともに排泄したりして、タネまきをする役割を担っています。
とくに秋には、いろいろな動物が冬の間に食べるためにドングリなどの木の実を埋めて蓄えます。その食べ残しも、やはりタネまきとなるのです。この「貯食」行動は、今の時期、動物園でもよく観察できます。


クルミを埋めるニホンリス


ドングリを埋めるルリカケス


ヤマガラ

公式X

⁘ヤマガラの貯食はこちら➡

＼紙面向上のため、簡単なアンケートにご協力をお願いします／
アンケートに答えた方に紙面掲載動物のオリジナルデータをプレゼント！

発行：（公財）東京動物園協会　制作：上野動物園
◇無断で複製・転載しないでください　◇紙面に関するご質問等は教育普及係 解説班へ（03-3828-5171）

公式X　公式Instagram